

---

# 赤い鈴

尼野邪紅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤い鈴

### 【Zコード】

N4482M

### 【作者名】

尼野邪紅

### 【あらすじ】

戦争のせいで引き裂かれた男女の物語。beatmaniaの「赤い鈴」を小説にしてみました。

女（前書き）

拙い文でスマスマセン。

私は戦争が嫌いだ。大好きな彼を奪つたから…

「じゃあ行つて来るよ。」

軍服姿の彼が私に告げた。

「絶対に帰つてきてね。私、待つてるから。」

「うん。そうだ!此。受け取つて!!」

彼から受け取つた物…

「此は…鈴?綺麗な音。良いの?」

「ああ。僕が帰るまで持つてて。必ず取りに来るから…そしたら

一泊置いて…

「そしたら?」

「結婚しよう!それまで鈴が指輪代わりだから。」

私は嬉しかつた。指輪では無いけど、今は仕方無い。

「…はい。私、信じてる。だから必ず…」

そう言つて一人はキスをし、彼は戦争に向かい彼女は待つた。

—数日後—

戦争が終わり兵士達は自分達の帰る場所に戻つて行く。しかし、彼は戻つて来ない…。

「お氣の毒にね。貴女の彼は戻つて来ないなんて…」

近所の老婆が笑いながら私に言つ。

「いえ、彼は必ず帰つて来るつて約束しました。」

「でも、現に帰つて来ないじやないかい。きっと…」

「絶対に帰つてきますー！」

私は老婆を否定した。

「いい加減諦めたらビリだい？彼は戦死したんだ！現実を受け止めなさい。」

老婆は子供に優しくするよつて口づける。

「貴様、嘘吐き嘘吐き！彼は帰つてくると言つてるじゃないか！！この嘘吐きめ…嘘を吐く貴様の舌なんぞチョン切つてやる。」

「ひいいー！」

老婆は一日散に逃げていた。

嘘吐き嘘吐き嘘吐き嘘吐き嘘吐き嘘吐き…皆、嘘吐きだ…！戻つて来るつて言つたじやない？ねえ、お願ひだから早く帰つてきてよ…

私の精神は限界だった。頭の中では走馬灯のように彼との思い出がグルグルと回っていた。発狂し壊れてもただひたすらに待ち続け…

…部屋の中には彼から貰つた鈴の音が鳴り響いた。

## 男（前書き）

切り替わって“彼”視点。ラストはホラー風にアレンジしています。

男

僕はある朝、軍の責任者になつた。

「僕には待つてる人が居るんです。早く帰らせて下さい！」

「駄目だ。まだ終わつておらん！貴様は我が軍の責任者なんだぞ？ ちゃんと従え。」

戦争はもう終わつたといつのに、何故帰れないのだろう？

「しかし…我が軍は勝つたんですよ？ 何故、まだ此処に留まつているのですか？」

「確かに勝つた。…が、勝利の余韻に浸つてる時こそ氣を引き締めねばならないのだ。…でないと撃たれるぞ。」

上司は指で鉄砲を作り僕を撃つ真似をする。

「や、そんな…」

こんな馬鹿げた事がいつまで続くのだろうか…

—数週間後—

上司も安全宣言を出し、僕はようやく彼女の元へ帰れた。

何て声掛けよつて、口メン、待たせて…かな？ ただいま…とか？ まあ、結婚しよう…かな？

やつと帰れて嬉しいの?、何だろ?胸がぞわめく。気のせいか鴉がまるで僕を嘲笑うかのように鳴いている。

考え事をしていると…彼女の家に着いてしまった。僕は、扉をノックし彼女を呼ぶ…が、返事はない。もう一度呼んでみるとやはり返事がない。思い切ってノブを回してみると鍵は開いていた。

「おい、帰ってきたよ。何処に居るんだ。」

探してみるが彼女の姿は見当たらない。

「何処に行つたんだろ?つか。…ん?」

りいん…りいん…

遠くから鈴の音が聴こえた。

りいん…りいん…

やがて鈴の音は近付く…

「嘘吐き嘘吐き嘘吐き嘘吐き嘘吐き嘘吐き…」

彼女の声がし僕は彼女を探した。しかし彼女の姿は何処にも無く…

「何処に居るんだ。出してくれ。」

「嘘吐き嘘吐き嘘吐き嘘吐き嘘吐き…」

僕は彼女を探す。部屋の中には鏡があつた。其処に映つていたのは…

僕と…

血まみれの彼女だった…

「ずっとずっと待つてたのに…すぐ戻るつて言ったのに…嘘吐き嘘吐き嘘吐き…」

鏡にしか写らない彼女が耳元で囁いた。

「待つてくれ！僕は早く帰ろうとしたんだ。でも…」

「言い訳なんて聞きたくない！どれだけ寂しかった事か…でも大丈夫。」

首に手が掛かつた。

「モウズツト一緒ダカラ…」

「うわあああ！」

僕は恐怖で叫んだが首に冷たい手が力を掛け息が出来なくなつた。

苦しい…。怖い…。離して…。誰か、助けて…。タス…ケテ…

部屋中に鈴の音が鳴り響く。赤い赤い鈴の音が…

「ズツト一緒ダヨ。ウフフフ…。」

彼女が嬉しそうに告げたがその頃には意識は遠のいていた。

ーーー

## 男（後書き）

コレを読んだ後にギタードラのクリップを見ると分かりやすいかと思います。

beatmaniaは色々なクリップがあるので興味のある方はYoutubeなどで見て下さいね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4482m/>

---

赤い鈴

2010年10月9日00時09分発行